西田哲学会会報

第十九号

題字　上田閑照

発行・西田哲学会
〒九二九―一二二六
石川県かほく市内日角井一番地
石川県西田幾多郎記念哲学館内
電話（〇七六）二八三―六六〇〇

ご挨拶

美濃部　仁

この度、思いがけず西田哲学会の会長をお引き受けすることになりました。会員の皆様には、どうぞよろしくお願い申し上げます。お引き受けした以上微力を尽す所存ですが、私のもっている会長のイメージと私の知っている私自身がかけ離れているため、どうすれば会に貢献できるのか、思い悩んでいます。

高校の漢文の時間だったか、昔の天子堯が、天下が治まっているかどうか見に出かけたところ、老人が腹つづみを打ちながら、自分は自分のやりたいことをやっている、天子の力なんか関係ないという歌を歌っているのを耳にした、そして安心した、という話を読んだことがあります。学会の運営は国の政治とはずいぶん違うでしょうが、学会があることによって、学会がない場合よりも一人ひとりが自由に、また快適に自分のやりたいことができるというのが理想だという点では、似たところがあるように思います。

その理想は、言うまでもなく、何もしないことによって実現するものではありません。その実現には、堯がもっていたとされるような、ほんとうの意味での大きな力が必要です。私の尊敬する先生がたが会長をなさっているときは、その人格と学識によって、アリストテレスの言葉を借りれば「愛される者が（愛する者を）動かすように」、ご自分では動かなくとも会が動くということが実現していました。三木清が西田について「先生と話していると勉強がしたくなる」と記していますが、これまでの会長にはそういうところがありました。それは一つの理想的な姿であろうと思われます。しかし、そのような会長であることは私には到底できそうにありません。私にできるのは、まずは、むしろ動けるだけ動いて、会員の皆様がそれぞれご自分の力を存分に発揮できる環境を整えることかと考えています。

西田哲学会は西田という個人の名前を冠した学会です。個人の名前を冠した学会では、その人の事績やテクストについての細かい穿鑿ばかりがおこなわれ、哲学に必要な広い視野が欠けてしまうのではないかという危惧が設立当初からありました。しかし、その危惧は現実のものにはなっていません。むしろ、西田という具体的人物がいてそのテクストがあることは、流行や思い付き、または思い込みにもとづく乱暴な議論を抑制し、本来の哲学的議論の場を確保しているように思われます。また、設立以来、本会では会員を狭い意味での哲学専門研究者に限定しないという方針を採用していますが、それは、哲学以前と哲学以後を問題にする本来の哲学のあり方を追求するために大きな役割を果たしていると思われます。私としましては、このようなすぐれた伝統を受け継ぎながら、会員の皆様がそれぞれ自分の問題を考え、また協力して自分の生きている「時代を思惟の中に捉える」（ヘーゲル）ことができるよう、できるかぎり工夫したいと思います。

皆様には、会をますます活性化するために、遠慮なくご意見をお寄せくださいますようお願い申し上げます。

（二〇二一年九月五日）

西田哲学会第十九回年次大会報告

熊谷　征一郎

西田哲学会第十九回年次大会が、令和三年七月二十四日（土）、二十五日（日）の両日、Zoomで開催された。当初は、京都大学を会場にして開催される予定であったが、新型コロナウイルスの感染状況に鑑み、昨年度の年次大会に引き続き、Zoomで開催されることになった。初日

の午前には、『善の研究』の講読会が開かれた（詳細は、「『善の研究』講読報告」参照）。『善の研究』講読会の後、二つの研究発表が行われた。

研究発表

一人目の発表は、森レイ氏（京都大学）による「西田幾多郎における「主体」の概念」であった。

氏の発表では、西田における「主体」概念の意味を、テクストに即しつつ前期から後期まで通史的に明らかにすることを通じて、〈西田の論文「実践と対象認識」以降の「主体」は、「近代的」な「個人」のコノテーション（含意）をもつ〉と先行研究では理解されているのに対し、「個人」のコノテーションはもたず、むしろ「種」「社会」「民族」のコノテーションをもつ、と論じられた。

二人目の発表は、古家愛斗氏（青山学院大学）による「後期西田における諸直観概念の関係性――行為的直観、自覚的直観、創造的直観を中心に――」であった。

氏の発表では、「創造的直観」と「自覚的直観」とは絶対者に関わる概念であるのに、西田の最晩年の宗教論においてさえも用いられなくなったのは、両概念は二つの異なる方向を強調してしまうが、西田が目指したのは両方向が矛盾的に統一されている宗教論であったからであり、「行為的直観」が両概念を備えつつ宗教的な次元をも含む概念として完成されたからである、と論じられた。

二日目、二十五日（日）の午前にも、四つの研究発表が行われた。

一人目の発表は、高谷掌子氏（京都大学）による「西田哲学における「形成作用」としての教育の成立過程――芸術・生命・イデヤ」であった。

氏の発表では、西田における「形成作用」の意義を、前期・中期からさかのぼって明らかにすることを通じて、西田の〈教育＝一種の形成作用〉という定式は、教育者が教育行為の限界に一瞬一瞬に触れるとともに、それを越えて被教育者が「自己形成」をなす作用を指し、被教育者の「自由」をも肯定するものであるゆえ、〈人格を物扱いする〉という危険および批判を免れる、と論じられた。

二人目の発表は、眞田航氏（大阪大学）による「歴史的現在と行為的直観――後期西田幾多郎の歴史論について」であった。

氏の発表では、〈現在が過去未来に同時存在的に対している〉という「歴史的現在」は、「同一」でありながらも「差異化」するという「重層的構造」を有するものであり、この構造は、私たちの「行為的直観」を通じて生起する歴史的世界の構造にほかならないのであって、そのダイナミズムが、私たちが日常的に経験している「移り行く時間」として立ち現れているのだ、と論じられた。

三人目の発表は、Steve Lofts氏（ウェスタンオンタリオ大学）による“Cassirer and Nishida: Expression and the I-Thou”（「エルンスト・カッシーラーと西田幾多郎：表現と私と汝」）であった（英語による発表）。

氏の発表では、カッシーラーのシンボルの哲学と西田の場所の哲学とは、歴史的世界の具体的出来事である「シンボルの場所」として一緒に考えられねばならないと論じられ、私と汝に関する二人の説のラディカルな本質や、二人の視点の結びつきおよび違いを充分評価するために、古典的なニュートン物理学から場の量子論へのシフトの文脈において、二人の説を位置づけつつ考察がなされた。

四人目の発表は、侯乃禎氏（北海道大学）による「西田哲学と田辺哲学における自力の問題――一九四四年の西田の田辺批判と『懺悔道としての哲学』を中心に――」であった。

氏の発表では、西田と田辺は、対象化できない自己を捉えようという問題意識を共有していたが、西田は「対象論理」の立場から「場所的論理」の立場に転換することを通じて、「自力」による矛盾あるいは「根元悪」は最終的に除去され得ると捉えたのに対し、田辺はたとえわれわれが絶対者と関係してもそれは除去され得ないと捉えた点に、二人の差異を見て取れる、と論じられた。

講演会

初日の午後には、二つの講演が行われた。

最初の講演は、西平直氏（京都大学）による「西田哲学と「東洋的世界観の論理」」であった。

講演では、〈特殊が自己否定することによって普遍になり、普遍が自己否定することによって特殊になる〉というように、相互に自己否定を交換し合う循環的なダイナミズムに、西田の論理の特徴が見出された。そして日本文化に関する西田の論理は、一方では偏狭な排他的ナショナリズムに対して、他方ではコスモポリタニズムに対して、両睨みを利かせるものであった、と位置づけられた。

西田は、排他的ナショナリズムに対して、日本文化の「物に行く」という精神が「普遍性」をもつことを強調するあまり、日本文化は科学的精神につながるものだと語ったが、その結合は性急であり、丁寧な検討が必要である、と指摘された。すなわち、西田の言う「物に行く」には二つの意味があるゆえ、「物に行く」を二段階に分けてみる必要があると共に、西田はその二段階に対応するかたちで「科学」も二重に理解している、と分析された。「物に行く」の第一段階は、〈我々と対立する対象世界〉にアプローチして行くという意味であり、西洋の近代科学の精神と重なるものである。「物に行く」の第二段階は、〈我々を含んだ客観的実在界〉

に行く、という意味であり、この段階に対応する科学は、自己がその中にいる全体を見るような、東洋論理と結合した新しい科学である、と分析された。

西田は、西洋の論理は「普遍」であると同時に「特殊」であると語るが、東洋の論理も東洋の生活に根差したものであり、「普遍」であると同時に「特殊」であるにもかかわらず、東洋から出てくる「新しい論理」をそのまま「普遍」の論理として語り、その「特殊性」を十分語らないが、先述の循環的なダイナミズムのなかに、東洋論理の特殊性と普遍性もバランスよく位置づけるべきである、と論じられた。

つづいての講演は、関根清三氏（聖学院大学）による「西田幾多郎と内村鑑三、あるいは哲学と宗教の関係について」であった。

講演では、まず西田と内村が愛娘を亡くしたときの反応が比較され、類似性と相違が分析された。そして二人の反応の相違は、〈哲学の課題〉と〈宗教の課題〉との相違に遡る、と指摘された。

次に、二人の神理解が取り上げられた。内村は「汎神論」に強く共感していたと共に、汎神論の短所も見ていたことが指摘された。他方、西田の「万有在神論」を三段階に整理したうえで、その万有在神論は汎神論の短所を超えるものだと評価された。

そして西田にとって「万有在神論」的な神の端的な事例が、旧約聖書におけるイサク献供物語（通称「アケーダー」）の神であった、と指摘された。西田によるこの物語の解釈は次のように整理された。すなわち、〈真に絶対的な神は自らの善性を否定して、アブラハムに子殺しを求める極悪にまで下るからこそ、悪の低みから悪逆無道の人を救うことができるのだ〉、と。

しかし西田による解釈は、アブラハムが極悪に堕ちていたという点にまでは踏み込んでおらず、西田が論じ残したこの点を補完するのが、内村による解釈である、と指摘された。内村による解釈は次のように整理された。すなわち、〈アブラハムに息子イサクを与えたのは神であり、本来、イサクは神のものであるにもかかわらず、アブラハムはそのことを忘れ、息子イサクは「自分のもの」だと見なしていたが、イサクを神にささげることを通じて、再び神からイサクを与えられたのであり、かくして神はアブラハムを罪から救ったのだ〉、と。

神がアブラハムに子殺しを命令するのは、一見すると、理不尽で非倫理的に見えるが、西田と内村による解釈の方向こそ、イサク献供物語の真相を抉り出し、その謎を解くことのできる解釈史上唯一のものである、と評価された。

シンポジウム報告

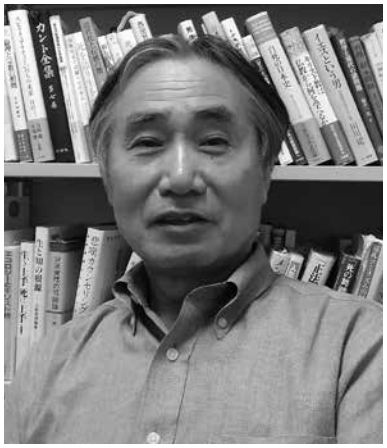
「生死とケアと西田哲学」

石井　砂母亜

今年度もオンライン開催となった第十九回年次大会であるが、当初企画が立てられたときは京都での開催予定であった。昨年度のノウハウを活かしながらシンポジウム自体は成功裡に終えられたものの、対面での開催であったならば会場内はどのような空気感に包まれたのだろうか、誰もが抱える老病死という苦しみをめぐって参加者はその場でなにを考え、どのような刺激を得て会場を去ったのだろうか、オンライン開催では零れ落ちることもしたことについても考えさせられるシンポジウムとなった。

今年度のテーマは「生死とケアと西田哲学」である。百年前の西田が置かれていた状況は、生にまつわる老病死という苦に腐心せざるをえない毎日であった。一九一八年に母を失い、翌年には妻が脳溢血で倒れた。さらに長男も失い、子どもたちも次々と病いに倒れ、一九二五年には介護の末に妻をも亡くすことになる。哲学の動機を「深い人生の悲哀」とする西田は、私生活において老病死という悲哀と向き合ったのである。西田哲学の根本動機が「悲哀」にあるならば、身体の儚さや脆さ、そこに付随する老病とケアに付随する苦しみや悲しみも西田哲学の根本動機に含まれていたはずである。老病とケアということに焦点を当てることで、西田哲学の中心課題でもある生死の問題の一端を明らかにできないか、その企てがコロナ禍における今大会のシンポジウムであった。

提題者は浅見洋氏（石川県立看護大学）と丹木博一氏（上智大学短期大学部）である。浅見氏は西田幾多郎記念哲学館の館長であり本学会の理事でもある。西田哲学のみならず死生学やエンドオブライフケアにおいても多くの研究を残されている。また丹木氏は当学会の会員であり、専門は現象学であるものの、特に否定性や表現とい



うことで西田哲学への関心が深く、ケアについての著書も上梓されている。まずは浅見氏が「エンドオブライフケアの現在とアポリア――場所的論理は新たなケアの視座たり得るか」と題して発題され、その後「行為的自己の否定性と生命の表現――西田幾多郎におけるケア論の可能性」と題して丹木氏が発題された。以下、簡単に見ていきたい。

浅見氏は、コロナ禍における哲学の意義を西田哲学から紐解いた上で、コロナ禍におけるエンドオブライフケアのアポリアと看護ケアのあり方について提題された。看護ケアの歴史に立ち入りつつ、看護ケアが現在、あらゆる健康状態の個人、家族、集団、コミュニティの包摂関係を基盤とする「ケアの総体」として考えられており、特にメイヤロフの考察がケアの可能性を開くものだと紹介された。メイヤロフによれば、「ケアは、私がこの世界で〝場の中にいる（being in place）〟ことを可能」にする。「自己の生の意味を生きることは、私と補完関係にある対象をケアすることにより、〝場の中にいる〟ということ」だとするメイヤロフのケア論は西田の場所論と重なりあうと、浅見氏は指摘する。事実、現在のエンドオブライフケアは医療中心モデルから場所論的にその人の住まうコミュニティでの医療と生活を統合するケアに変化してきており、「地域包括ケアシステム」や「アドバンス・ケア・プランニング（ACP）」はこうした取り組みの一環である。これらの取り組みは自宅や地域で最期を迎えたいとするニーズや、ケアされる側の「迷惑をかけたくない」という心情にも寄与している。もちろんコロナ禍においてこうした取り組みを維持することは難しいが、感染管理を踏まえた上で新たなる試みも始まっている。コロナ禍におけるこのような運動を西田の場所論的哲学の例証として見ることは可能であり、またパンデミックという非常時だからこそ「非常時なればなる程、我々は一面に於て落ちついて深く遠く考へねばならぬと思ふ」（7-341）という西田の言葉は力を持つと、浅見氏は締めくくられた。

人間がケアされケアして生きているという事実、またそこにつきまとう困難さから、丹木氏は議論を起こされた。西田の思惟の固有な特徴の一つは、「人間の弱さ」と「創造性」の両面を行為的自己の立場から統一的に理解しようとしたところにある。丹木氏は西田の行為的自己に立ち返ることで、ケアの問題に新たな地平を開くことができると指摘する。どこまでも反省的に自己を対象化しようとする知的自己に対して、行為自己は作られたもののうちに脱自的に自己を見る立場である。行為的自己には世界の創造的要素としての意義が認められるものの、しかしその創造性は否定性と不可分の関係にあり、そのことがケアの困難さを考える糸口になる。丹木氏は藤川幸之助氏の介護経験を事例として取り上げ、ケアには他者や現実によって自己が否定されることを受け入れざるをえない過酷なところがあると指摘する。ケアの困難さの多くが、ケア主体が形成されないまま自己を否定する出来事だけが進んでしまうことにある。しかしこの否定性こそがケア主体を育む力を持っており、丹木氏は西田哲学を通してケアにつきまとう困難さとそこに息吹く創造性という新たなるケア論の地平を開かれた。

オンライン開催ということもあり、本シンポジウムは海外からの参加者にも恵まれた。ご自身の介護体験を踏まえた質問や、介護を介した我-汝関係の成立による自己変容が世界の変容とどう繋がるのかといった議論もなされ、活発な質疑応答の場となった。海外の研究者とオンタイムで議論ができる素晴らしさを味わいながらも、老病死を抱えるこの生身の身体をもって集うがゆえに生まれるグルーヴを味わえない寂しさもあった。コロナ禍という否定性を通して気づかされる課題は多く、その意味でも本シンポジウムは実り豊かなものになったと思われる。

『善の研究』講読報告

西田哲学会の入門講座である『善の研究』の購読は、第十九回年次大会の一日目の午前中に行われた。今回の購読箇所は第四編「宗教」の第一章「宗教的要求」であった。フェリペ・フェハーリ（四日市大学）が前半の第一段落から第三段落までを、白井雅人（立正大学）が後半の第四段落から第五段落までの講読を、それぞれ担当した。担当者は『善の研究』を読みながら、西田哲学における「宗教的要求」という概念の解釈を発表し、購読会の参加者と共にディスカッションを行なった。

西田幾多郎によれば、「宗教」というのは自己が要求するもの

であり、「神」というのはまさしく経験された実在である。この考えは、一九一一年に出版された『善の研究』のみならず、西田の他の作品にも見いだすことができる。『場所的論理と宗教的世界観』では、西田が「神なくして、宗教と云うものはない。神が宗教の根本概念である。併し色が色として眼に現れる如く、音が音として耳に現れる如く、神は我々の自己に心霊上の事実として現れるのである。」と述べている。つまり、西田における「神」と「宗教」の概念は、互いに切り離して考えることはできないのである。しかし、西田における「宗教」は、特定の宗派や教会と関係があるわけではない。実際、彼は、特定の宗派宗教を奨励することもなければ、もちろん、それに没頭することもなかったのである。西田の思想において、個人が宗教と関わる仕方は、あくまで個人的な問題なのであった。

　種々の行為が、身体による生の発現として理解されうるように、宗教は、精神による生の発現として理解されうる。而して、宗教を重要視しない者は、身体的には生きているが、精神的には死んでいるのである。そのような者は、完全な人生をまっとうすることができず、また人生を全体として真摯に受け止めることができない。

　一般に、「宗教というのは何か」と質問されるとき、人は、「宗教とは良き人生のために必要なもの」と答えるであろうが、西田は、宗教にさらなる価値を認める。つまり、宗教は人間の人生全体にとって必要なものなのである。彼によれば、宗教は人生の目的であり、このことを、彼は「宗教的要求」として捉えている。すなわち「宗教的要求」とは、自己自身が、自己に固有の意識と、世界（あるいは宇宙）との統一を要求するということである。

　ある人は、科学を通じて、このような「統一」を、あるいはその「統一」についての理解を得ようとするかもしれない。ところが、西田によれば、このような「統一」は宗教を通じてのみ達成できるのである。そして実際、その「統一」は、つまるところ、彼が「神」として理解するところのものだと言える。さらに、その「神」は、単なる観念あるいは概念ではなく、実際に存在し、かつ経験されるような関係なのである。

　『善の研究』の、結論的な第四編の題目は『宗教』であり、そこでは、「宗教的要求」、「宗教の本質」や「神」について論じられている。実際、同著の『序』において、西田は次のように述べている。「第四編は余がかねて哲学の終結と考えている宗教について余の考えを述べたものである。」

　諸々の行為が身体の生命の活動の発現として理解できるのと同じように、宗教というのは精神の生命の活動の現れである。そのため、宗教を重視しない人は身体的に生きているが、実際に精神的に生きているとは言えないのである。そのような人の人生は完全ではなく、人生全体を重視できない。

　一般的な人の「宗教というのは何か」という問いの答えは、「宗教が良い人生のために必要なもの」[1]であるが、西谷と全く同じように、西田は宗教にそれ以上の価値を認める。つまり、宗教は人間の人生全体に必要なものである。しかし、西田によると、それは人生の目的であるので、「宗教的要求」の「要求」という語は英語に翻訳すると「demand」（求め、探索）を意味しながら、同時に「quest」（旅、探求）という意味を持っている。言い換えると、西田の表現は自己の意識と世界の残りの部分の統一のための「請求」である。

　ある人は科学を通じて「統一」、またはその理解を求めようとするが、西田によれば、我々は宗教を通じてのみその「統一」を達成できる。そして、実際、その「統一」は「神」として理解されるものであろう。その「神」とは観念、または概念であるのみならず、存在し、経験される関係であるのだ。

（フェリペ・フェハーリ）

注

1　西谷啓治『宗教とは何か』創文社、一九七三。

エッセイ

会長任期を終えて

秋富克哉

　このたび、規程上一度の再選を経て二期六年務めさせていただいた会長職を退くことになった。上原新編集委員長から、副編集委員長への就任要請を引き受けたのに合わせてエッセイ執筆の機会をいただいたので、六年を振り返らせていただく。

　六年前、三人の錚々たる先生方の後を受け、最年少の会長として覚束ない歩みを始めたのが、烏兎匆々、気がつけば一年後に還暦を迎えるところまで来てしまった。回顧的エッセイとして私たちになじみ深い「或教授の退職の辞」を西田が書いたのが満五十八歳であるから、それを一歳越えたと思うと、我ながら驚きを禁じ得ない。このエッセイをこよなく愛された上田閑照先生がかつて還暦を迎えられた頃、ゼミか何かの折りだったが、「私ももう六十歳」と感慨深くおっしゃったのをお聞きし、二十代前半の私は、先生の老々とした落ち着きを受け止めながら、六十

歳になるとどんなふうになるのだろうと遠く遥かな先を思ったものだ。いざ実際に近づいてみると、「こうなった」としか言いようがないのだが、ちなみにその時の先生のお話の続きは、「最近は、子どもと老人に特に興味がある」というものだった。限りない可能性を持つ子どもの世界には興味が尽きないとして、他方で老人というのが今一つしっくりこなかったが、すでに老年の域に入られつつあった先生にとって、老人とは決して興味の対象などではなく、いかに歳を重ねていくかがご自身の課題として受け止められつつあったのだということを今実感として思う。

さて、改めてこの六年であるが、学会の立ち上げ時から関わってきた立場上、それまでの蓄積を大切にしながら、さらなる一歩をという気持ちで進めてきた。大会のプログラムにも少しずつ工夫を試みてきたつもりである。ただ、コロナ禍のここ一年半の目まぐるしさは、全く想定外であった。そのようななか、前回もこの紙面で書かせていただいたが、事務局と幹事諸氏の大車輪の活躍は、どれだけ強調してもし過ぎることがないほど見事なものだった。相談は受けるものの、自分たちで次々に手際よく進めていく様は、本当に頼もしかった。私もまた学会設立時より幹事として動き回り、そのような姿勢が認められて会長にも選んでいただいたのだと思うが、もしコロナ禍がもう少し早く押し寄せていたら、ネット技術に明るくない私が幹事会を引っ張っていくなど到底できなかっただろう。改めて時機に恵まれ、若い仲間に恵まれた幸せを思う。もちろん、常々私を導いて下さった理事の諸先生・諸先輩方の温かなご高配は、心の大きな拠り所だった。

一方、世の常とは言え、何人かの親しい方々とのお別れも、六年という年月の重みを増すものとなる。上田先生については、ここに改めて記すのは控えさせていただくが、西田哲学会の大きな特色である一般会員として、信州のお二人の先生、上伊那と諏訪それぞれの地で教育実践に多大な足跡を残された平澤郁夫先生と細野祐先生は、共に教育の根幹には哲学がなければならないという強いご信念のもと、特にその哲学を西田哲学に求められた。年次大会に足を運ばれては、初日の朝から『善の研究』の講読の席で、真剣に、かつ楽しそうに学んでおられたお姿は、脳裏に焼き付いている。

尊敬する年長の方々のご逝去はもちろん悲痛だが、自分より若い世代の死はまた特別である。本会で活動を共にした杉本耕一君と宮野真生子さん、思い出は時と共に純化され、もはや歳をとることのない彼らとの年齢差は広がる一方だが、若い彼らの書き残したものが永遠化されて私に強く語りかけてくる。それは、先人の書き記したものとはまた違う趣を持つように思われる。

会長職はこうして終わりを迎えたが、今後とも、美濃部新会長に協力しながら、本会のために微力を尽くす所存である。最後に、代々の編集委員や会計監査を含む諸役員の方々、そしてすべての会員の方々に、この場をお借りして心から感謝の言葉を申し上げたい。六年間、本当に有難うございました。

理事選挙結果と新役員体制

第七期（二十一～二十三年度）理事選挙結果

郵送にて六月十日締め切りで行われた西田哲学会理事選挙につき、西田哲学会事務局である石川県西田幾多郎記念哲学館において六月十五日午後一時三十分より開票と集計作業を行った結果、届いた投票用紙（十名まで記載可能）が五十枚、有効投票は四九八票となり、次の二十名が当選となりました。選挙の結果は、「選挙が行われる会計年度中に七十歳を超える理事は五名を超えて選出されてはならない」という規定に基づき、調整を行いました。（得票数順、同数の場合は五十音順）

秋富克哉、上原麻有子、氣多雅子、水野友晴、藤田正勝、大橋良介、美濃部仁、浅見洋、森哲郎、大熊玄、白井雅人、板橋勇仁、岡田勝明、小坂国継、田中裕、石井砂母亜、太田裕信、田口茂、竹花洋佑、米山優

新役員体制

会長　美濃部仁

委嘱理事

ロルフ・エルバーフェルト、斎藤多香子、松本直樹、ブレット・デービス、エンリコ・フォンガロ、林永強、アントニオ・ネト・フロレンティーノ

編集委員

上原麻有子（編集委員長）、秋富克哉（副編集委員長）、石井砂母亜、白井雅人、竹花洋佑

会計監査

杉村靖彦、長町裕司

幹事

飯島孝良、石井砂母亜、石原悠子、猪ノ原次郎、太田裕信、熊谷征一郎、白井雅人、竹花洋佑、中嶋優太、名和達宣、フェリペ・フェハーリ、松本直樹、森野雄介

（中嶋優太）

理事会報告

令和三年度第一回理事会（旧理事会）

西田哲学会第十九回年次大会の開催にあわせて、七月二十四日十七時より、オンライン会議システム Zoom にて、令和三年度第一回理事会が開催された。出席理事は二十二名（委任状出席一名を含む）、理事以外に幹事六名が出席した。

●第二十回年次大会について

令和四年七月二十三日（土）～二十四日（日）に東京で開催されることが決定された。

●理事選挙について

事務局の中嶋優太幹事から、第七期理事選挙の結果が報告され、承認された。

●編集委員会報告

（1）水野編集委員長より、コ

ロナ禍の考慮に基いた年次大会及び『年報』第十八号掲載論文応募の〆切の延期の結果、その発行の遅延が報告がなされた。早くて八月、遅くとも九月には発行される予定である。

（２）九本の応募論文があり、査読の結果三本が掲載されることになった。

●事務局報告

（１）令和二年度会計報告、令和三年度予算案が提示され、承認された。

（２）入会希望者の入会、退会希望者の退会、除籍候補者の除籍が承認された。

●上田閑照基金の運用について

基金運営委員会の秋富会長より、「西田哲学会上田閑照基金」運用（案）」が説明・提案され、承認された。

（太田裕信）

令和三年度第二回理事会（新理事会）

七月二十五日（日）の年次大会終了後の十六時三十分より、Zoom にて、先の選挙で選出された新理事による理事会が開催された。出席理事は十七名であった。

●新体制について

理事の互選によって、美濃部仁理事が会長に選出された。

慎重な審議の結果、ロルフ・エルバーフェルト氏、斎藤多香子氏、松本直樹氏、ブレット・デービス氏、エンリコ・フォンガロ氏、林永強氏、アントニオ・ネト・フロレンティーノ氏に委嘱理事就任の依頼をすることになった。

前期編集委員のノウハウを引き継ぐために、前期編集委員であった石井砂母亜理事、白井雅人理事が引き続き編集委員の任に当たることが承認された。

理事の互選によって、編集委員長に上原麻有子理事が選出された。編集委員定員五名のうち、残り二名は上原編集委員長を中心に検討し、後日理事会で承認を得ることとした。

慎重な審議の結果、杉村靖彦氏、長町裕司氏に会計監査を依頼することが決定された。

幹事については、美濃部会長を中心にして、前幹事会メンバーと協議しながら新幹事を選出し、後日理事会で承認を得ることに決まった。

●秋の理事会について

Zoom を用いて、令和三年十月三十一日に理事会を行うことが決定された。

●次回年次大会について

コロナ禍で見通しが立たないため、東京で開催するのか、地方で開催するのか、リモートで開催するのかなど、慎重に情勢を見極めて、秋の理事会で検討することになった。

（白井雅人）

上田閑照基金について

昨年度の大会の総会で、上田閑照先生・眞而子奥様からのご遺贈金二千万円をもとに「西田哲学会上田閑照基金」を立ち上げ、基金運営委員会を設置して管理運用していくことを報告させていただくとともに、規約を承認していただきました。今回、その規約第三条の使途について、具体的な運用方針を委員会で検討し、理事会での審議・決定を経て、総会時に報告、そして承認をいただきました。既に、ホームページに「運用方針」として掲載しております。

具体的には、西田哲学会の企画（大会、研究会、その他）にかかる費用の援助、および西田哲学研究ないし広く日本哲学研究の発展に寄与する事業のための費用の援助であり、後者のうち、会員が国際学会等で発表参加する際の研究助成、また会員が著書や翻訳書を出版する際の助成に関わるものです。次回秋の理事会で申請フォーマットを作成し、ホームページに掲載するとともに、申請を開始する予定です。

（秋富克哉）

西田哲学研究会のご案内

・山口西田読書会［於山口］

山口西田読書会では令和三年八月三十一日現在で原則毎週土曜日開講の西田読書会（佐野之人担当）が二八一回、木曜日開講のニーチェ読書会（岡村康夫担当）が一六九回を数えます。また七月より新たに月一回文学読書会（村上林造担当）を開始。西田では「場所」、ニーチェでは『反キリスト者』を精読中。文学読書会では村上春樹の短編を扱っています。コロナ禍で基本的にオン・ラインです。卒業修了祝を兼ねた発表会「饗宴」は中止。卒論・修論発表会のみ行い、福沢諭吉と西田幾多郎が扱われました。読書会・発表会に関する記録はＨＰでご覧いただけます。

（佐野之人）

・西田哲学研究会［於京都］

京都の西田哲学研究会は、コロナ禍による約一年間の休止を終え、本年四月と八月、二回のオンラインによる会合を実施しました。『一般者の自覚的体系』から再開、前回は「叡智的一般者」の前半を扱いました。海外を含め遠方からも多数の参加をいただいている一方、常連で参加して下さっていた一部の方に参加していただけないことを残念かつ申し訳なく思っていますが、現状では、もう少しこの形式で続けざるを得ないと思っています。本件についてのお問い合わせは、秋富（akitomi@kit.ac.jp）までお寄せ下さい。

（秋富克哉）

・寸心読書会［於石川県西田幾多郎記念哲学館］

寸心読書会は一九四七年に始まった哲学館で最も伝統のある事業です。例年、年間十回程の予定で西田や京都学派の思想家の著作を読んでいます。二〇二一年度は、新型コロナウイルスの感染防止のために会場をホールにするなどしておりますが、感染の状況に応じて開催時期をずらさざるを得ない回が出ています。年明け三月頃に新たに年間の受講の申込を受け付ける予定です。講読範囲、受講方法、受講料等、詳細につきましては、哲学館ウェブサイト等をご確認ください。

（中嶋優太）

・寸心荘読書会［於鎌倉］

学習院西田幾多郎博士記念館は、今春より少人数の見学に限る形で再開されているが、市民講座「寸心荘読書会」については、未だ休眠状態を余儀なくされている。デルタ株の蔓延により、若年層にも感染が広がりつつある現状では、朗読、対話を基本とする読書会の開催は困難である。ワクチン接種者のブレイクスルー感染、また感染者に対する効果的な初期対応を妨げる防疫・治療体制自体の不備の為に、感染が判明しても治療を受けられぬまま重篤化、死亡する例も増えつつある惨憺たる現状を目の当たりにして改めて思われることは、囚われを離れることの大切さである。西田幾多郎はこうした惨状をどのように見るのだろうか。（二〇二一年八月）

（世話人・講師　岡野浩
岡野利津子 g.g.h.okano@w2.dion.ne.jp）

石川県西田幾多郎記念哲学館だより

新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、七月三十一日～九月十二日が臨時休館となったほか、いくつかの講演会・読書会を中止・延期せざるを得ませんでした。そのなかでも学びの機会が失われないよう、感染防止の対策を行い、時期をずらすなどして、できる限り哲学普及の事業を継続しています。

【『西田幾多郎未公開ノート類研究資料化　報告４』刊行】

『報告４』には二〇一五年に発見された資料の全容を概観できる調査の結果も掲載しています。五十冊のノートの調書、および二五〇部のノート以外の資料のリストのほか、読書ノートについては、西田が読んだ書籍の著書別にノート・資料を探すことができる索引なども掲載しています。ノートの全ページの画像をご覧いただけるウェブ上の「西田幾多郎ノート類デジタルアーカイブ」とあわせて研究にご利用ください。『報告』の購入を希望される方は哲学館までお問い合わせください。

【企画展「頂天立地自由人―西田幾多郎の青春時代―」開催中】

哲学館ではテーマに沿った企画展を行っています。現在の企画展の会期は、十月五日～二〇二二年三月二十一日まで。西田は校風の変化に反発して抵抗運動を行い、第四高等学校を中退しています。西田自身が「生涯において最も愉快な時期」と振りかえる青春時代を紹介しています。

（中嶋優太）

「頂天立地自由人」という文字を掲げた集合写真

「年次大会」における口頭発表の応募について

第二十回年次大会（二〇二二年七月開催）の口頭発表者（日本語または英語）を公募します。発表希望者は、二〇二二年三月末までに、八〇〇字程度の要旨と簡単な経歴・業績表を添えて事務局にお申し込みください。

『西田哲学会年報』掲載論文の公募について

『年報』巻末の応募要領にしたがってご投稿ください。たくさんの応募をお待ちしております。なお次の第二十号掲載分は、編集の都合上、**令和四（二〇二二）年十月末**をもって一つの区切りといたしますのでご了承ください。応募にあたっては、ホームページに掲載の投稿規程と執筆要項をご確認下さい。

編集後記

この度、前編集委員長・水野友晴先生のお役目を引き継ぎ、会報および年報の編集取りまとめをさせて頂くことになりました。敏腕の前編集長に比べ、甚だ頼りない責任者でありますが、幸い、前会長・秋富克哉先生が副編集委員長をお引き受け下さり、また頼もしい編集委員である石井砂母亜先生と白井雅人先生や新委員の竹花洋佑先生より力強いご協力を得て、会報本号の発行に辿り着きました。中嶋優太事務局長には、様々な面でご親切なサポートを賜わりました。

美濃部仁新会長は、「ご挨拶」によりますと、本学会のさらなる「活性化」を目標とされているようです。近年、若い方々による新しい西田哲学研究が次々生まれてきているとの印象をもっております。本学会を通して、より多くの次世代の研究者が輩出されるよう、刊行物の充実と活性化に努力してまいりたいと存じます。

（編集委員長　上原麻有子）